

2010年ICU夏期日本語教育 教務報告

教務主任
平田 泉

1. 日程

a. 夏期日本語教育開始までのスケジュール

2009年	11月	夏期日本語教育講師募集 開始
	12月	受講生募集 開始
2010年	2月	講師依頼 開始
	3月	受講生願書締切 受講生選考 開始 教養学部事務Gとの授業ヘルパーに関する打合せ(1回目)
	4月	学生助手及び文化プログラム助手 募集・選考 受講生への合格通知 発送
	5月	各コースのセクション数及び講師の担当コース(仮)を決定 会話ボランティア募集 開始 講師への担当コース連絡、使用教科書及び該当する通常 コースのシラバス送付 総合学習センターとの打合せ
	6月	図書館との打合せ 教養学部事務Gとの打合せ (2回目) ホストファミリー説明会(於:アラムナイハウス) 学生助手及び授業ヘルパー図書館オリエンテーション プレースメントテスト 準備(JLPとともに)
	7月	講師室及び教材作成室 設営(三成工業、学生助手、授業 ヘルパー、ILCの担当スタッフによる) プレースメントテスト受験室 設営 学生助手へのCALLオリエンテーション

b. 夏期日本語教育期間中のスケジュール

2010年 7月2日(金)	午前	ヘッド会議
	午後	講師全体会
36日(土)	午後	講師作業可能日(於:本館講師室)
5日(月)		プレースメントテスト 実施 図書館オリエンテーション(第1回、第2回) 歓迎会(於:大学仮設食堂) 歓迎会終了後 図書館オリエンテーション(第3回) キャンパス・ツアー プレースメントテスト レベル判定会議(SCJ ディレク

	ター、教務主任)
	担当コースの受講生の把握 (各コースの教員スタッフ)
6日 (火)	プレースメントテスト結果 発表 授業開始
	凡人社教科書 販売 (於: 本館 2階中央ラウンジ)
7日 (水)	講師全体会 (以後毎週水曜日)
9日 (金)	コース変更最終日
16日 (金)	講師懇親会 (於: アラムナイハウス)
8月13日 (金)	コース最終日 歓送会 (於: ICU 高校食堂)

c. 夏期日本語教育後のスケジュール

2010年 8月19日 (木)	受講生に修了証 発送
末日	コース報告書提出 締切
10月20日 (水)	2010年度夏期日本語教育 報告会
28日 (木)	2010年度夏期日本語教育 反省会
11月 末日	『ICU日本語教育研究7』研究論文投稿締切

2. コースについて

a. 授業時間とスケジュール

2010年度夏期日本語教育は全期間6週間、1コマ70分の授業を1日3コマ週5日間、プレースメントテスト、中間及び最終テストを含め90コマ行った。

b. コース担当講師と学生数

レベル	セクション	責任講師	講師	学生数
C1 (初級1)	A	貴志佳子	渡部萌子	12
	B	川口真理子	井本美穂	8 (ロータリー生のみ)
C2 (初級2)		小島祐子	小野由美子	16
C3 (初級3)	A	佐々木真実	和泉貴志	10
	B	田中望美	石山 治	11
C4 (中級1)		萩原章子	神谷美由紀	12
C5 (中級2)	A	成 永淑	山川 史	8
	B		大村麻文 ドーソン静香	10
C6 (中級3)		中田かおり	藤本恭子	10
C7 (上級)		バーケン眞佐子 増田恭子		7
7コース		20名		104名

今夏は通常学期の「特別日本語」に該当するC8にプレースされた受講者はいなかったが、C7は受講生7名のうち2名が継承系の学生であった。この点を考慮し、上級のコー

ス内容に継承系の要素も多少入れる事にした。そのため、C8の責任講師として準備していたベーケン氏とC7の責任講師として準備していた増田氏をC7の担当教員とした。

c. 使用教材

「夏期日本語教育（以下、SCJと呼ぶ）は通常学期と同等」であることから、主教材・副教材とも通常学期と同じものを基本的に使用した。SCJ終了後の講師へのアンケート回答には、初級、中級ともに主教科書の検討を促すコメントもあった。このコメントには、主に、教科書への理解不足から生じるもの、教科書そのものが持つ問題から生じるものの2つがある。通常学期、SCJともにプログラムの目標を達成し、高い成果を上げるために、現教科書・教材の改良、整備、また必要な教材の作成を継続する。

3. 受講生に関して

a. ローターリー奨学生

全9名うち8名がC1を、1名がC2を受講した。ロータリー生の日本語学習の目的と、SCJが目標とするものとの間にずれがあるように見受けられる。この点において、ロータリー生の受講に関し検討が必要である。

b. 応募資格の明示

SCJは短期間に高い成果を挙げる事を目指すため、受講者には大学生として学ぶ事を通して身につけるであろう高い集中力と学習技術、さらには、自立/自律性と体力が要求される。そのため、今夏からSCJ受講時に大学生になっていない場合には、SCJへの応募を受けないことを徹底した。2011年SCJのパンフレットにはその点を明示する。

c. 受講生の心身の問題への対応

- 1) 受講生の心身の問題に対応するため、SCJ期間中を通じて、看護師（毎日9:00-17:00）及びカウンセラー（週二回13:00-17:00）を置いた。カウンセラーに関しては、今回バイリンガルであったことが、受講生がより相談し易い言語を選ぶことができて好ましかった。
- 2) 富士登山の厳しさへの認識不足によって生じる問題を避けるために、受講生のプログラム中の富士山登山を禁止した。例年問題となった登山後に体調を崩し授業を休むという事態も避けられ、適切であった。

3. 助手・ヘルパー

今夏はラボ助手は設けず、学生助手3名及び授業ヘルパー1日3名、計6名が毎日勤務、学生助手は基本的に毎日（8:30-16:30）、授業ヘルパーは計12名がシフトを組み、1日（8:00-16:00）3名という勤務体制と組んだ。授業ヘルパーのSCJ参加は初めての試みであった。今後のSJCへのより効果的な関わり方を模索したい。

学生助手は3名で教務関係、ラボ・機器関係、SCJ事務室との連絡等、昨年度までの教務助手及びラボ助手が行っていた事柄を担当した。3名が全期間出勤可能であったの

で、人数は適切であった。IT 機器に強いこと、日本語・日本語教育に関する知識と関心があること、仕事に従事するものとしての倫理を持っていることが望まれる。

講師からの会話ボランティアへの要請の取り纏め及びそれに対するボランティアのアレンジ、ボランティアとの諸連絡、来校したボランティアへの対応を、学生助手の 1 名が責任を持って当たった。この仕事に複数の担当者がかかわる場合に生じる必要な引き継ぎの煩雑さや、そこから起こりうる手落ち等がなく良い方法ではあるが、この 1 名が突然休まざるを得なくなった場合に対応できる体制を整えておくことが不可欠である。

4. 教室及び学習環境

a. 講師室

講師 20 名、学生助手、授業ヘルパー、教務主任が仕事し、且つ印刷機、教材、文具、お茶、冷蔵庫等を設置するには狭い。しかし、これらが 1 部屋にまとめられていたことはプログラム運営、教員及び事務スタッフとの連携、人的な交わりを強めるうえで、有効であった。

b. 教材作成室

設置した機器類とその数は昨年とほぼ同じである。印刷機は大量印刷の場合を考えてゼロックスコピー機ではなくリトグラフを入れた。機種が古い（ソーターがない等）場合はかえて使い勝手が悪く効率が落ちるので、機種は新しいものが望まれる。

c. 機器類

PC の数は昨年度と同数であったが、もう少し増やせるといい。講師への便宜として、毎朝 8:30 までに PC 2 台を立ち上げておき、必要に応じ講師はだれでも 1 限開始前に使用できるようにした。

d. 図書館

学生の多くがグローバルハウス、樺寮に宿泊し、宿泊施設に IT 使用可能な環境が整っていたためか、午後図書館のコンピュータを使用する学生が極めて少なかった。学生助手 1 名が毎日午後 1:00-4:00 までコンピュータ使用のサポートのために図書館に待機したが、殆ど必要がなかった。今後この状況が続くのであれば、学生助手が午後図書館に待機しないことを検討してもよい。

e. 言語生活

SCJ は学内宿泊施設・プログラムが行われている教室等が外部から孤立し、また夏期休暇時ということもあり日本人学生も学内に不在である。そのため、日本語が日本人によって実際使用されている場に触れる機会が少なくなりがちである。受講生が日本に来て日本語を学ぶ意義が十分に見いだせるよう一層の工夫をしたい。